

プログラム・ノート

PROGRAM NOTES

解説・柴田 克彦 Katsuhiko Shibata

沼 尻竜典の東京シティ・フィル定期初登場となる本公演は、ラフマニノフの名作が中心をなしている。しかも1901年作のピアノ協奏曲第2番と1940年作の「交響的舞曲」は、若き日の決定打と作曲家自ら「最高傑作」と語った人生最後の作品。生で続けて聴く機会が意外に稀な両曲で体感する大家の変遷が興味深い。急遽出演が決定したピアニストが、日本を代表する名手・小山実稚恵である点も思わぬ喜び。近年ますます円熟味を増している彼女が弾く十八番作品への期待値はすこぶる高い。そして復興への希望を感じさせる芥川也寸志の代表作を加えたプログラム全体を通して、明晰な辣腕マエストロが引き出す東京シティ・フィルの新たな特性にも注目が集まる。

芥川也寸志(1925～1989)

交響管弦楽のための音楽

文豪・芥川龍之介の三男として東京に生まれた芥川也寸志は、1954年まだ国交がなかったソ連に渡り、著名作曲家の知遇を得て帰国後、その影響を反映した明快な作品を次々に発表。映画音楽の傑作も多数生み出

し、指揮者としても活躍した。

この曲は、そうした活動に至る前の若き日に書かれた出世作。今なお演奏機会も多い。1950年(昭和25年)2月、NHK放送開始25周年記念管弦楽懸賞の応募作として作曲され、特賞を受賞。同年3月日比谷公会堂にて、近衛秀麿指揮／日本交響楽団(現・NHK交響楽団)により初演された。さらに1955年には史上初の来日オーケストラ、シンフォニー・オブ・ジ・エアーが取り上げ、その指揮者ソーア・ジョンソンによってアメリカでも200回以上演奏された。

曲は、明快な旋律と歯切れ良いリズムをもった生気漲る音楽。特に躍動感と活力に溢れた第2楽章は、終戦後わずか5年という復興期ならではの前向きな明るさに充ちている。

第1楽章……アンダンティーノ。淡々と刻まれるリズムに乗って木管楽器が奏でる軽妙な主題と、弱音器付きトランペットの応答フレーズを中心に進行。弦楽器の細かい動きも加わり、中間部ではイングリッシュ・ホルンが出す哀しげな旋律が広がっていく。

第2楽章……アレグロ。シンバルの一撃後、トランペットとトロンボーンが奏する力強い主題を軸に元気よく進み、木管楽器が出す軽妙な主題や弦楽器のなだらかな主題を挟みながら、賑やかなクライマックスが形成される。

■楽器編成

ピッコロ、フルート2、オーボエ2、
イングリッシュホルン、クラリネット2、
バスクラリネット、ファゴット2、
コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、
トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、
バスドラム、スネアドラム、シンバル、
ピアノ、弦5部

セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)

ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18

近代ロシアの作曲家にして大ピアニスト、ラフマニノフの代表作のひとつ。彼の4つのピアノ協奏曲のみならず、ロシアの同分野の中でも、チャイコフスキーの第1番と共に最上位の人気を得ている。

モスクワ音楽院在学中から作品が評価され、前途洋々に思えたラフマニノフだが、1890年代末期になると、交響曲第1番の初演失敗、文豪トルストイの作品否定、初恋の人の結婚などが重なり、作曲不能の事態に陥った。しかし1900年に精神科医ニコライ・ダーク博士の暗示療法を受けて立ち直りをみせる。そして夏のイタリア旅行を契機に本作の創作を始め、翌1901年に完成。同年秋モスクワにて作曲者の独奏で行われた初演も大成功を収め、曲はダーク博士に献呈された。ただし、ラフマニノフはこうした時期にも指揮などの活動を

普通に続けていたため、最近では博士の治療の高評価に疑問が投げかけられてもいる。

曲は、20世紀初めの作とは思えないほど濃厚なロマンティズムと、難技巧を伴う近代的なピアノイズムが融合した、スケールの大きな作品。古典的な3楽章構成の中で、甘美な旋律と抒情味に溢れた音楽が、ダイナミックなピアノと重厚なオーケストラによって連綿と展開される。ロシアの鐘のごときピアノにオーケストラの雄大な主題が重なる第1楽章冒頭は特に印象的。第2楽章のメイン主題や第3楽章の第2主題は名旋律として知られ、ポピュラー音楽にも編曲されている。

第1楽章……モデラート。冒頭の雄大な第1主題と、センチメンタルな第2主題を軸に、劇的な展開を遂げる。

第2楽章……アダージョ・ソステヌート。抒情的で甘美極まりない緩徐楽章。テンポを速めた中間部では、とりわけピアノが活躍する。

第3楽章……アレグロ・スケルツァンド。リズムミカルな第1主題と優美な第2主題が対比されながら進み、壮大なクライマックスが築かれる。

■楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、
クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、
トランペット2、トロンボーン3、チューバ、
ティンパニ、バスドラム、シンバル、弦5部

セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)

交響的舞曲 作品45

ラフマニノフは1917年、ロシア革命を避けて亡命し、その後は主にアメリカで暮らした。だが亡命後は、ピアニスト活動に重きを置いたことや、故国を離れた精神的痛手が相まって、作品は少数にとどまった。この曲はその稀少な一例にして生涯最後の完成作。1940年秋にニューヨーク近郊のロングアイランドで作曲され、翌1941年1月フィラデルフィアにて、曲を献呈されたユージン・オーマンディ指揮／フィラデルフィア管弦楽団により初演された。

当初は「幻想的舞曲」の名で着想され、各楽章には「真昼」「黄昏」「真夜中」(一説には「朝」「昼」「晩」)の題が考えられていたという。だが最終的には現タイトルに変えられて各楽章の題も外され、第4の交響曲ともいべき作品となった。すなわちこれは舞曲のリズムを用いたシンフォニックな音楽で、エネルギッシュかつリズムミカルな要素と作曲家特有のメランコリーやロシア的な抒情美が融合した傑作である。また人生を回想した作品との見方もあり、複数の自作やこれまで多数の曲で用いてきたグレゴリオ聖歌「怒りの日」が引用されている。さらには、第1楽章初めの3音の動きが曲全体の中心的なモチーフとなる点や、木管楽器が活躍する点も特徴的。中でもラフマニノフには稀なサクソフォンの使用(第1楽章のみ)が注目される。

第1楽章……ノン・アレグロ。木管楽器によ

る3音のモチーフに続いて力強い主題が提示され、行進曲風に進行。アルト・サクソフォンの物哀しい旋律に始まる抒情的な中間部が挟まれる。終結部には交響曲第1番の主題も登場。

第2楽章……アンダンテ・コン・モート(ワルツのテンポで)。不安げなワルツの楽章。幻想的、神秘的な雰囲気も漂う。

第3楽章……レント・アッサイー・アレグロ・ヴィヴァーチェ。「死の舞踏」とも形容されるスケルツォ風の楽章。遅い序奏から主部に移ると、真夜中を意味する12回の鐘をきっかけに変化著しい音楽が展開され、中間部ではワルツ風の旋律が歌われる。その後は「怒りの日」や自作「徹夜禱」の聖歌をもとに発展。「アレレヤ」と記された激しい終結部に至り、最後は銅鑼の音だけが残される。

■楽器編成

ピッコロ、フルート2、オーボエ2、
イングリッシュホルン、クラリネット2、
バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、
アルト・サクソフォン、ホルン4、
トランペット3、トロンボーン3、チューバ、
スネアドラム、シンバル、バスドラム、タムタム、
トライアングル、タンバリン、グロッケン、
シロフォン、チャイム、ピアノ、ハープ、弦5部

柴田 克彦(しばた かつひこ)

音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。「ぶらあぼ」「モーストリー・クラシック」等の雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレットへの寄稿、プログラム等の編集業務、講演や講座など、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。